

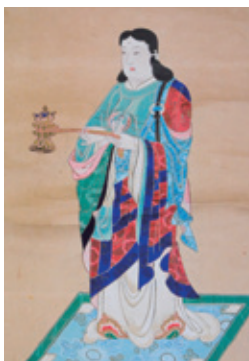
小美玉市の歴史を知ろう 53

太子講

職人が拝んだ聖徳太子像

聖徳太子

聖徳太子は冠位十二階や憲法十七条の制度を整え、日本仏教の導入者としても足跡を残した人物です。今年は聖徳太子1400年遠忌にあたり、これに関連して高崎地区太子講をご紹介します。



聖徳太子孝養像

太子講

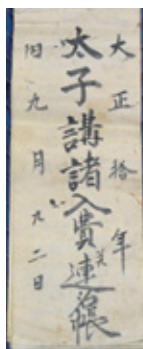
聖徳太子を信仰する職人の講を「太子講」といいます。大工・左官・建具屋など、木工や建築関係の職人で構成され、多くは聖徳太子の忌日といわれる月の22日前後に行われました。太子講は江戸時代が始まったとされ、その由来の一つは法隆寺にあると考えられます。法隆寺は大陸の建築技術を日本独自に発展させて

建築されました。その創建者である聖徳太子を、職人が職能神として信仰したのが、後に太子講につながったとみられます。

田余村職工組合文書と高崎地区の太子講

田余村職工組合文書(玉里史料館所蔵)には高崎地区の太子講関連史料が残されています。高崎の太子講は、大正期頃は「職工会」、昭和8年(1933年)には「田余村技工組合」の職人によって組織され、例年正月22日か旧9月22日に行われました。当日は当屋(行事の中心的役割を担う人)の家に職人が集まり、聖徳太子の掛軸「孝養像」に太子への感謝の祈りを捧げ、職人の団結や技量上達を念じました。講では会食を開き、時には相談も行いながら、職人同士の親睦を深めました。大正、昭和期の「太子講諸入費并連名帳」には、太子講の経費などが記載されています。その内訳は酒や

食材をはじめ、当屋宅への座敷料などがあります。食材の内容は、鶏、そば、ネギ、豆腐、油揚げなどで、年によって魚(サンマなど)もふるまわれました。食材は大正、昭和を通してほとんど変化がなく、旧来から受け継がれていたものと考えられます。



太子講諸入費并連名帳

高崎の太子講は、大正10年(1921年)には既に始まっており、昭和17年まで行われました。太平洋戦争が始まった後も、しばらくの間続けられました。たとえ戦時中であっても、伝統を絶やさず守り続けてきた職人たちの気概が感じられます。

その後太子講は一時中断し、昭和28年に再び復活します。昭和40年以降、開催日は1月3日、5日など年によって開催日が異なり、時代や環境の変化に対応して講を行った様子がうかがえます。昭和53年、記録上では最後の太子講が行われました。

祈念の場だけでなく、生業を同じくする人たちがつながる場所でもあった太子講。職人同士の親睦を深め、技

術を切磋琢磨し、地域に還元する効果もありました。田余村職工組合文書は、今では失われた民間信仰の一例や、その時代に生きた職人の姿を伝えています。

【語句解説】

講…神や仏など、信仰を同じくする人々が集まって結成した団体。
遠忌…五十年忌、百年忌など没後に長い期間を経て行われる年忌。
孝養像…みづらを結び、柄香炉を持ち袈裟をつける聖徳太子像。太子が16歳の時、父の用明天皇の病氣平癒を祈る姿を表している。

玉里史料館ミニ展示

「太子講—職人が拝んだ聖徳太子像—」

今回紹介した資料を展示します。

期間 11月13日(土)~1月16日(日)

場所 玉里史料館

(生涯学習センターコスモス内)

休館日 月曜日、11月23日(火)、12月28日(火)~1月4日(火)、1月11日(火)

※新型コロナウイルス感染対策防止のため、期間や内容が変更となる場合があります。

問い合わせ 小川図書館・資料館 ☎ 0299-58-5828